

國學院大學學術情報リポジトリ

戦国期における神社の動向：九州地方を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永田, 忠靖, Nagata, Tadayasu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002477

はじめに

中世日本の宗教の柱となるのは仏教と神祇祭祀であり、両者がその独自性を保持しつつ、融合しているのが特徴であった。上島亨氏は、宗教が思想的・哲学的な思惟の産物であるとともに、社会的・歴史的存在であると述べている。そのため、宗教史を検討する方法として、「思想・教学や信仰などの思想的・哲学的視覚と宗教を取りまく国家・政治や社会などとの関係を重視する歴史学的視点」の大きく二つが存在すると指摘している。つまり、社寺内部組織や機構は社会的な存在として歴史学的視点での分析を要し、儀礼・祭祀には宗教思想が凝縮されており、その維持運営には世俗の関与が不可欠ということで思想的視覚と歴史学的視点からの検討が必要としているのである。本論においても、この検討分析の視点を意識するものであり、戦国大名権力と宗教的権力との関係性を論じるには不可欠と思われる。また佐藤弘夫氏は、中世を神仏の時代とし、社寺が巨大な社会的勢力・圧倒的な宗教的権威として社会に位置づけられるとともに、中世ではあらゆる主張や言説が神仏の回路を通じて発せられていたと指摘し、更に病氣・災害から運・不運、また人間の意思決定などすべての事象が神仏の石と関連づけられ、説明・納得されてきたことを述べている。²

中世において社寺の存在は、黒田俊雄氏における権門体制論で説かれる、国家における支配イデオロギーとして政治的な社会勢力として位置づけられ、戦国期になると各大名による領国経営が進むなか、それまでの荘園基盤に支えられてきた権門が衰退してきたとされている。³また坂本勝成氏は中世的社寺権力の否定において、政治的、社会経済的側面と宗教的側面との両面から、戦国末期から近世初頭にかけて、世俗権力の代表たる大名権力によって社寺権力の否定が行われたとし、検地によって社寺荘園は崩壊し、改めて社寺に所領が寄進、安堵され、それと並行してなされたアジュール権の否定は古代的伝統に支えられた中世社寺の宗教的権威の失墜を招いたとしている。⁴また井上寛司氏は、社寺の経済的衰退がもたらした変質として中世後期の一宮の特徴を次のようにまとめられている。①「国」支配秩序の動揺、②諸国一宮の世俗の守護権力への相対的な従属制の強化⁵、③一宮の持つ絶対性の動揺、④「国鎮守」としての機能を失って衰退・解体した一宮の登場としている。⁶また荘園制の崩壊がもたらすこと以外にも、戦乱絶えない戦国期においては、戦火による破却や略奪などにより、社寺の持つ力は物理的にも精神的にも削がれていくようになる。萩原龍夫氏は、もともと戦国大名の性格として、多くが旧秩序に対する批判者であり、社寺が財産や施物を貪って頹廢しているのを苦々しく感じていたことを、「北条早雲廿一箇条」において「祈祷の本意は財物を捧ぐるにあらず、心からの畏敬である」という考え方から説明している。⁷さらに社寺の破却について横田光雄氏は、多くの社寺が戦乱の中で、略奪・放火に遭ったことは、社寺の宗教的権威の凋落とし、その社寺破壊の背景にある精神的風土として地縁的な性格を帯びた日常的信仰の排他的要素と、神仏の擁護に対する現世中心主義的意識が存在していたと指摘している。⁸また松浦義則氏は池上裕子

氏の論をまとめ、戦国期が中世の人々を強く規制してきた神仏の力（聖なるもの）が決定的に衰退した時代であると示している。¹⁰

しかし、この戦国期における社寺が宗教的権威を失い、ただ衰退の一途を進んでいったのであろうか。例えば、西国において一大領国を有した大内義隆は、神道・仏教・儒教などに関心を寄せ、特に吉田神道への関心が強く、吉田兼右を山口にまで招き、領国内での神道伝授をもたらしている。伊藤聡氏は兼右の山口下向の目的として、当時敵対していた出雲の尼子晴久が義隆に向けて行った呪詛に対し、それを兼右により削除し、呪詛返しを求めていたことを示した。大内・尼子の両氏の呪詛・祈祷合戦に兼右が有力な祓者祈祷者として登場することには注目するべきであろう。¹¹このことについて、井上智勝氏は、地域社会における吉田家の宗源宣旨の授受の目的の一つとして、地域側から怨霊神からの祟りに対する予防・解除をする呪力や起請返しなどが求められていたとしている。それは、戦国期における戦乱に伴って、祟りを解除する必要性が高まっていたからだ指摘している。¹²戦国武士の宗教的関心についても、河合正治氏は、既成宗教に対して、多少批判的で現世的合理思想があっても、少なからず宗教に対する関心と情熱があり、それがかえって祈祷的な面を好む傾向にあったのではないかと説明している。¹³

近年として、地域社会における社寺について多くの事例が論じられるようになった。宮島敬一氏は地域社会が、それぞれの地方社寺の存在および祭礼・神事の執行を重要な目的とした上で、土豪や地侍が祭礼・神事に積極的に関わることで、地域社会の「秩序」の維持者であることを示したことは、地方社寺がもつ「公共」的性格を有しており、古代以来の社寺の持つ本質的な機能であるとしている。そして地方社寺が個別の村を超越した地域の結集地とし、守護や戦国大名などの支配権力との回路にもなったとしている。¹⁴また服部光真氏は、近江国甲賀郡の油日大明神を郡鎮守化することで、在地領主層が村落や郡内の社寺を地域秩序に組み込む意図を見いだしている。地域社会の政治的分裂のなか、油日大明神を中核に置くことによって宗教的秩序を政治的秩序に反映させることで地域的結集を生み出したとしている。¹⁵中世の宗教が論じられる場合、中世前期は黒田氏をはじめとした国家と宗教の枠組みのなかで、支配イデオロギーとして全ての社寺を大きく括らせる傾向にあったと思われる。その影響を受けながらも、中世後期または戦国期において、中世前期では成り得たであろう支配イデオロギーが崩壊し、各論として元来地域に根ざしていた社寺の存在性を改めて再確認する論が進められるようになった。そこには神事や祭礼を通じた地域社会の結集・結束を見いだすことができるのであるが、宗教的権威を地域社会の秩序付けや「政治的」に利用するという範疇にあるかと思われる。

戦国期は宗教的権威が衰退する反面、逆に地域社会に求められる新たな社寺の存在が確立した時期になると思われるが、私がかつて本論で示していくことは、近世という新たな時代を迎える過渡期における戦国期で、直接的に戦国大名と対峙する日本国内としてもま

た地域としても有力である神社が、その存在を守っていくためにどのような対応をしていったかを神社内部の動きから探ろうとするものである。神仏の力の衰退や宗教的権威の失墜など、戦国期の社寺がネガティブに捉えられる傾向はないだろうか。中世に入ると朝廷の凋落や荘園制の崩壊などから社寺での経済的打撃が問題となってくる。経済基盤の確保は祭祀を継続していくため、そして神社を守るためには必須であり、中世ではその経済基盤の維持のために、様々な方策がとられてきたであろう。さらに武士が台頭して、社寺領の押領などが横行するようになると、社寺は社寺領を維持していくために、諸勢力らと結びつきを持つだけでなく、自らが武力を持つようになり、更には領主化するなど力をつけるようになる。これは社寺が次のような二面性を持つようになったと思われ、一つは祭祀など宗教的側面（＝聖的側面）、もう一つは経済や社寺経営など政治的側面（＝俗的側面）と考える。その点では、経済的に打撃を受けることで、造替や祭祀の懈怠・緩怠などが生じるので、そのことが宗教的権威の失墜とされてしまうのかはいささか疑問を感じる。戦国期における社寺の否定と言われるものは、神仏が否定されていると同義にはできないかと思われる。それは社寺が持つ、中世を通して構築された荘園を基盤とする在地勢力としての否定だったと考えられる。九州に代表される戦国大名大友義鎮は、豊前国一宮である宇佐宮を破却する反面、祈願依頼や放生会の再興などを行っている。この破却と再興という二面性を考えるに、社寺が持つ一体化した「聖」と「俗」の性格を分離するには、一度破壊することで、「俗」的要素を取り除き、本来あるべき「祈る場」として、再構築したとも考えられる。

この論のスタートとなる大友義鎮の社寺に対する破却について考えていく中で、何かこの局面を打開していこうという社寺が持つ何かしらのエネルギーを感じるようになっていった。戦国期は伝統的荘園制度など、既得の権益が否定されていくなかでも、社殿の修理造替、祭祀の斎行などをいかにして「社例」「先例」に倣い、次世代に継承させていったのかに興味と関心が出てきたのである。今回、九州という地域を選択したのは、戦国期において大内氏・毛利氏・大友氏、広げれば少弐氏、龍造寺氏、島津氏と、群雄割拠の地であり、またその中でも、筑前・筑後・豊前という地は、それら諸勢力にとっては要衝の地であり、社寺が受ける影響というものは計り知れず、それぞれの神社を「点」で捉え、大名を通して「線」として結ぶことができるかを試みるものでもある。近年では、県史料や神社史料の編纂が進み、膨大な史料が体系的になされたことも、研究を大きく進める恩恵となった。宇佐宮は社家組織の一体化によって、積極的に自らの主張を貫く姿勢を示し、太宰府天満宮は内部組織の対立構造によって弱体化することを契機に、その時勢にあった柔軟な対応を、またその勢い及ぶ大名に祈禱巻数を贈ることで、自らの存在を示していく。そして高良社でも戦乱の中、分裂する内部組織を大宮司家に集束するために『高良記』を記すことによって、神威の向上と体制の刷新を行っていく。さらに、筑前国宗像社の宗像大宮司は大内氏との関係のなか、武家の棟梁として、また祭祀者として、その経営にあたるが、大内氏の滅亡による後ろ盾を無くすことで、周囲との戦を行

ながらも、宗像社での体制強化を行っていく。

これらを見るだけでも、一応に対応が様々であることがわかるが、そこには、神社内部から生み出される「主体性」というものが垣間見られるのではないかというのが、出発点である。連綿と現在も継承される神社において、時代や人や様々なことが変わっていく中で、唯一変わらぬものがあるとすれば、それは社に鎮座する奉斎神ではないだろうか。そして、この奉斎する神々が扱った所となり、戦乱の世で衰退していく神社が、その奉斎神の神威によって、再びその存在性を顕かにする機会となったのではないだろうか。各章では、戦国期から近世への過渡期の中、当該神社が、受け身の立場ではなく、神社の持つ本質的な祭祀と信仰から生まれる「主体性」というものを導くことができたなら幸甚である。

- 1 上島亨「日本中世の宗教史」(吉田一彦・上島亨編『日本宗教史』日本宗教史を問い直す)吉川弘文館 二〇二〇)
- 2 佐藤弘夫『神・仏・王権の中世』(法藏館 一九九八)
- 3 黒田俊雄『権門体制論』(黒田俊雄著作集)一 法藏館 一九九四)
- 4 坂本勝成「中世的寺社権力の否定過程について」(中尾堯編『論集日本仏教史』第六卷戦国時代)雄山閣 一九八八)
- 5 田村正孝「中世後期における信濃国一宮諏訪社と地域」(ヒストリア 一九九 二〇〇六)
- 田村氏は、室町期の信濃国では一宮が守護への依存を強める動きを見せないとし、それが信濃では守護支配に脆弱であったことを指摘している。
- 6 井上寛司『日本中世国家と諸国一宮制』(二〇〇九、岩田書院)
- 7 萩原龍夫「戦国大名と神社および神道」(『東京学芸大学研究報告』第九集 一九五八)
- 8 横田光雄『戦国大名の政治と宗教』國學院大學大学院研究叢書文学研究科 四(國學院大學大学院 一九九九)
- 9 池上裕子『戦国の群像』(『日本の歴史』⑩ 一九九二、集英社)
- 10 松浦義則「戦国研究の動向」(『歴史論評』五二三 一九九三)
- 11 伊藤 聡「天文年間における吉田兼右の山口下向をめぐる」(『文学』第十三卷第五号 二〇一一)
- 12 井上智勝「地域社会における吉田神道の受容・宗源宣旨の授受を中心に」(『日本歴史』四一六 一九九七)
- 13 河合正治『中世武家社会の研究』(吉川弘文館 一九七三)
- 14 宮島敬一「戦国期に近江における地域社会と地方寺社・祭祀・神事と奉加の政治性」(『地方史研究協議会編』宗教・民衆・伝統・社会の歴史的構造と変容)一九九五、雄山閣)
- 15 同氏『戦国期社会の形成と展開・浅井・六角氏と地域社会』(一九九六、吉川弘文館)
- 服部光真『戦国期における地域秩序の形成と地方寺社・近江国甲賀郡を事例に』(稲葉伸道編『中世の寺社と国家・地域・史料』二〇一七、法藏館)